

高橋さやか著

幼年教育課程論

——保育カリキュラムを中心として——

津 守 真

幼児保育そのものと、本格的に正面からとりくんだ書物はきわめて少ない。啓蒙的に書かれたものや、断片的な意見はいろいろあっても、ひとつの問題について、その根拠をたずね、裏づけをもって構造を明ら

かにしようとした書物はほとんどないと言ってもよい。高橋さやか氏のこの書物は、この意味で、まじめな努力をされたすぐれた書物である。ひとりの著者の思考から生れたこのような書物が出れば、保育学はもっと形をなし、幼児保育はもっと向上するだろう。この著者の、本格的な追求の態度にまず敬意を表したい。

著者自身が述べているように、この書物は、同じ著者が以前に書かれた、「保育とその方法」の中の、「カリキュラムの問題」を別個にとり上げて、一冊の書物としたものである。乳児期から、幼児期、幼年期の教育のカリキュラムを理論的、かつ実際のに、青年期、成人期までの見通しをもつて、体系的に書かれている。カリキュラムの部分だけをとり出している点、それだけに専門的追求をしているとも言えるが、他面、骨組だけになって、指導法の問題があわせて論じられないと、十分理解できない点が残っている。

序章、発達過程と保育課程は、著者の発

達論、それに伴う保育論がよく整理されていておもしろい。著者の結論として、「結局、発達そのものと教育とが直結している時期が6才未満の時期であり、6才〜8、9才は、教育課程と個体の発達との間に分化がはじまる時期であり、9才以後、教育課程は個々の教科ごとにその教科独自の発展体系をもち……」としているのはうなづける。

第1章 保育及び幼年教育における目標で、乳児、準幼児（3才から5才まで）幼児（4才から6才まで）幼年教育（6才から9才まで）の目標が、整然と整理されている。このへんから、私としては、問題を感じるところが出てくる。著者は人格形成それ自体が、最終的目標であると述べているが、ここに示される目標は断片的である。分析すれば断片的になると言われるかもしれないが、単にそれだけではない、何か重要な要素がぬけているような気がする。

第2章 子どもの活動は、特色があつて

おもしろい。著者の見解がいくつかの表によって整理され、年令にしたがって子どもの活動が分化し、それに伴って教育活動が分化する状態が示される。たとえば、遊戯活動は、(1)身体活動、(2)音楽リズム活動、(3)言語活動、(4)観察活動、(5)造型活動、(6)総合的遊戯活動にわけられる。それぞれに教科活動が配分される。この教科活動という語が、この書物で一貫して用いられるが、それぞれの生活機能の側面に応じて、その面の活動が考えられることは当然である。著者も教科という語について、「小学校の教育への連繋という端的でしかし便宜的にあやまれやすい考え方によるのではなく、子どもの成長発達を見守り、かつ期待して、必要で欠けてはならないことを看過しないためには、どうしても子どもの器官とその機能に基づいて活動形態をとらえ、それを教科として設立して、一方では教科ごとに発展過程―発達の実情をあとづけ、他方、教科相互間の関連と、生活活動としての統括とを与えることが要求されるので

ある。古い教科主義に泥むものではありたくないが、子どもの活動の中に生きている教科は、絶対に無視できないものと考える。」(48頁)と述べている。著者の言う「教科」という語は一般に用いられるものと必ずしも一致しないし、このような活動の配慮は当然である。しかし、終の方になると、著者の主義による教科を忘れて読者はこれをいわゆる教科にすりかえてよんでしまう危険がある。

単元の項も興味深い。著者の言うように、子どもの発達とかわりなくシークエンスを追うような単元は首肯しがたいし、「元氣な子ども」というような、具体的に何をするのかはっきりしないような単元名称は適切でないとする考えにも、賛成である。しかし、同一単元が二週間以上つづくことは適正でないという考えには賛成がたい。これはむしろ、単元の構造によるのではなくらうか。

第3章 保育カリキュラムの形態、第4章 乳児期のカリキュラム、第5章 準幼

児期のカリキュラム、第6章 幼児期のカリキュラムは、前章までの論述からの当然の締結である。それぞれの期について、発達概要と実際活動が、こまかく表にして示されている。こまかい点は異論もあるにしても参考になる点がいろいろある。第7章環境について、第8章 保育カリキュラムの資料及び教材について、終章 幼年教育の課程 と、かんたんに3つの章が加えられている。

全体に、集団保育を保育生活の基調とするという考えに立って、乳児期、準幼児期も、家庭保育と施設保育をわけていない。この点は、少しく無理があると思う。

非常によく整理されているだけに、子どもの生きた姿を感じることができないのは、カリキュラム論のみをとり上げることからくる必然なのか。

いろいろ、不満を述べたが、それだけ読みごたえのある専門書であり、本格的に幼児保育のことを学ぶものには、必読の書物である。(博文社 定価四八〇円)